

犬と古洋傘

小川未明

青空文庫

ある村から、毎日町へ仕事にいく男がありました。どんな日でも、さびしい道を歩かなければならなかったのです。

ある日のこと、男はいつものごとく考えながら歩いてきました。寒い朝で、自分の口や鼻から出る息が白く凍って見えました。また田圃には、霜が真つ白に降りていて、ちょうど雪の降ったような、ながめでありました。

このとき、どこからか、赤ん坊の泣く声がありました。男は思わず歩みを止めて、あたりを見まわしたのであります。

「はてな、赤ん坊の泣く声がきこえたが……。」

しかし、人の影はなし、近くに人家もなかったから、たぶん、空耳だろうと思つて、また歩き出しました。

すると、今度は、前よりも、もつと近く、赤ん坊の泣く声がきこえてきたのです。

「たしかに赤ん坊だ、どこだろう？」

彼は、もう自分の耳を疑いませんでした。きつと、この近傍にだれか赤ん坊を捨てたものがあるにちがいないと思いました。

「そんな悪いことをするやつは、どこのやつだろう。」と、男は、この寒空に捨てられた、かわいいそんな赤ん坊を、早くさがし出して、どうかしてやらなければと思つて、声のきこえる方へ近づいていきました。

見ると、それは、赤ん坊でなく、やぶの中に、まだ生まれてから間がない、やつと目の開いたばかりの小犬が三びき、箱の中に入れて捨ててありました。

彼は、赤ん坊でなく、小犬でよかつたと思いましたが、その捨てられた小犬の、いじらしいようすを見ると、また別の不憫さが心の中にわいてきて、

「こんな、まだ独り歩きのできぬ小犬をだれが捨てたのだろう、情け知らずの人間だ。」と、思いましたが、自分は、どうすることもできません。

「ああ、かわいいそんなものを見たな。」と、ただ、気持ちを暗くして、かわいいそうとは思ひながらも、そのまま、男はいつてしまいました。

「こんな寒空に、それに食べ物もないのでは、きつと死んでしまふだろう。」と、三びきの小犬のことを思いながら、道を急いでのです。

しかし、いくら思うまいとしても、白と黒の三びきの小犬が、重なり合つて、彼の顔を見たとき、尾をぴちぴちと振つて、助けてくれといわぬばかりに鳴いたいじらしい姿を、

男は、いつまでも目から取ることができませんでした。

彼は、町へ着くと、いつものごとく仕事にとりかかりました。仕事をしている間は、犬のことを忘れていましたが、その日の仕事が終わって帰り道にさしかかると、朝見た犬のことが、思い出されて、

「どうなつたろう？」という、好奇心も起こつて、なんだか、そのやぶの近くになると、重苦しいような気さえました。

彼は、やぶのそばへきて、耳をすましました。

もう泣き声はきこえません。

「はてな、みんな死んでしまったのかしらん。」

怖ろしいものでも見るようにして、のぞいてみると、三びきのうち二びきは死んでしまつて、一びきだけが、こもから出て死んだ兄弟のまわりをまわっていました。

この一びきも、晩には、死ぬであらうと思います。

男は、胸の中が苦しくなりました。よほど、この一びきを家へつれていつて、助けてやろうかとも考えました。

だが、その世話が、またたいへんだとも思いました。見なければ、知らずにしまったこ

とだ、そうだ、おれは、見なかつたことにして、このままいってしまおう……と、気の弱
い彼は自分の心をはげまして、そのまま小犬を見捨てて、家へ帰ってしまいました。

その夜は、前の晩よりも寒く、それに、風さえ烈しかったのであります。

男は、たびたび目をさまして、床の中で、後に一びき生き残っていた、いじらしい犬の
姿を思い出していました。

翌日、彼は、その道を通るのが、なんとなく心がとがめて、ほかの道を遠まわりして
仕事にいきました。帰るときも同じでした。二、三日の間というものは、その道を通るこ
とができなかつたのです。

ある日、雨が降りそうだったので、男は、急ぐために、その道を通つたのであります。
「どうなつたろうな？ きつと、三びきとも死んでゐるにちがいない。それともしんせつ
な人があつて、功德にどこへか葬つてやつたかもしれないが。」と、犬の捨てられた場所
に近づくにつれて、男は思つたのでした。そして、そのまま過ぎることができずに、つい
やぶ蔭をのぞいて見ると、犬の死骸もなければ、犬の入つていたこも見えませんでした。
そして、その場所に一本の古洋傘が置いてありました。

男は、その洋傘を拾つて、開けてみると、まだりっぱにさせる品物でした。

「このまま腐くさらしてしまうのは惜おしいものだ。さいわい、雨あめが降りふそうだから、拾ひろつていこう。」と、男おとこは、その古い洋傘ふる こうもりを持つて、立ち去た さりましたが、家いえに着つかぬうちに、雨あめがぽつぽつ降り出でしてきました。

「いわぬことか、いいものを拾ひろつてきた。」といって、洋傘こうもりを開ひらいてさして歩あるきますと頭あたまの上うへで、クンクン小犬こいぬのなき声こえがしました。彼かれは、びつくりして、洋傘こうもりを投げ出なすと、いっしょうけんめいに駈かけ出でしました。

「あのとき、おれが拾ひろつてやれば、一いびきにしろ犬いぬの命いのちは助たすかったのだ。一本ぼんの洋傘こうもりより、生き物ものの命いのちのほうが、どれほど大たい切せつかしないのだ。」と、正しょう直じきな男おとこだけに悟さとつたのでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 11」講談社

1977（昭和52）年9月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「犬《いぬ》と古洋傘《ふるこうもり》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

犬と古洋傘

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>